

# 会話参加の対称性の変化 —留学生と日本人ペアの場合—

岩田 夏穂

## 要 旨

本研究の目的は、日本語学習者と母語話者の会話参加において、対称性と非対称性が協同的に形作られるプロセスを詳細に記述し、何がその変化のきっかけとなったのかを明らかにすることである。対象は、留学生と日本人大学生のペア1組である。会話参加の変化の提示には、発話の連鎖に基づくイニシアチブレスポンス分析（IR分析）を用い、変化のきっかけについては、エスノメソドロジーの会話分析におけるアイデンティティ・カテゴリーの観点から考察した。

その結果、はじめは母語話者が質問し、学習者が答える一方向的で非対称的だったやり取りが、互いに相手の話を踏まえて意見や情報を述べ合うという対称的なものへと次第に変化していることがわかった。そして、両者のアイデンティティ・カテゴリーが相対立するもの（「留学生対日本人」）から、両者に共通するもの（「スポーツ愛好者」や「同じイベントへの参加者」など）へと変化していることが観察された。このことから、両者の柔軟なアイデンティティ・カテゴリーの交渉と変化がきっかけとなり、会話の様相が対称的なものへと変わったことが示唆された。

【キーワード】日本語学習者と母語話者、会話参加、対称性と非対称性、イニシアチブレスポンス分析、アイデンティティ・カテゴリー

## 1. はじめに

現在、日本語教育の現場では、学習者と母語話者（native speaker, 以後 NS）がともに活動に参加する様々な試みが行われている。そのような場面では、お互いに相手の発話を踏まえて談話を展開する対称的な参加を達成している場合もあれば、一方がより多くのイニシアチブを取る非対称的なやり取りになっている場合もあり、多様な会話の参加の様相が観察されると考えられる。

では、会話参加の様相は、参加者のどのような関わり方が作り上げているのだろうか。また、その様相形成のプロセスはどのようなものなのだろうか。

## 2. 先行研究

これまでの非母語話者（nonnative speaker, 以後 NNS）が参加する会話、いわゆる接触場面の会話参加に焦点を当てた研究では、言語能力が高い参加者がやり取りのイニシアチブを取ることが指摘されてきた（Beebe & Giles 1984; Fan 1992; Gaies 1982; van Lier & Matsuo 2000）。そしてその指標としては、割り込みや質問等、個々の参加者の行為の頻度が用いられてきた。しかし、この方法では、参加の対称性と非対称性が一人の参加者の行為によ

って決まるのではなく、協同的に作られることや、その様相形成の動的なプロセスが把握できない。

一方、相互行為の協同構築性に注目する立場では、会話参加の様相を「局所的な連鎖が作り上げる全体的な様相」（Linell 1990; Linell & Luckmann 1991）と捉える。そして本研究もこの立場に立つ。

## 3. 研究の目的と課題

本研究の目的は、学習者と母語話者の自由会話において、対称性と非対称性が協同的に形作られるプロセスを詳細に記述し、その動的な性質を明らかにすることである。そのために、参加のし方に変化が見られた会話データを対象に、下記の研究課題に基づいて分析を行った。

研究課題(1)：日本語の母語話者と非母語話者のやり取りで、参加の様相は、どのようなプロセスを経て変化するのか。

研究課題(2)：その変化のきっかけは何か。

## 4. 研究方法

### 4.1 対象者とデータ

対象者は、都内某大学の日本語講座に在籍していたドイツ語 NS の中級日本語学習者（ルーカス：仮

名)と日本人大学生(しんご:仮名)の男性のペア1組である<sup>1</sup>。収録時のルーカスの日本滞在期間は、約9ヶ月であった。また両者は、知り合い程度の既知関係にあった。収録は2003年7月に筆者立会いのもとで行い、約10分の自由会話を録音録画した。分析対象データは、主に音声データを文字起こしした<sup>2</sup>談話資料である。

## 4.2 分析方法

### 4.2.1 イニシアチブレスポンス(IR)分析

会話参加の様相の分析には、発話の連鎖に注目するイニシアチブレスポンス分析(initiative-response analysis)(Linell, Gustavsson & Juvonen 1988)を用いた。これは、「ターン」を分析単位とし、ターンが持つイニシアチブ的側面(談話を前に推し進める)と、レスポンス的側面(先行談話を受け止める)に注目する。そして、前後のターンとどう結びついているかで、個々のターンを19カテゴリーに分類し、各カテゴリーをイニシアチブの強さに従って6段階に評価する<sup>3</sup>。評価1から6に該当する主なターンの性質は次の表の通りである。

6段階評価に該当する主なターンの性質

評価	主なターンの性質
評価1	ターンのパス等で、最もイニシアチブが弱い。
評価2	最小応答や相づち
評価3	相手の発話内容を踏まえて新しい内容を付加する「バランスの取れたターン」。
評価4	相手の発話内容に関する質問
評価5	それまでの内容に関係のない新しい内容の導入
評価6	最もイニシアチブが強く、それまでの内容に関係のない質問

研究課題(1)では、データ全体(196ターン)を前半と後半に分け、さらに詳細に変化を追うために50ターンごとに分けた。それをそれぞれIR分析のルールに従ってコード化した。その結果をグラフに表し、グラフが示す様相と実際のやり取りに見られる特徴の関連を分析した。

### 4.2.2 アイデンティティ・カテゴリー

課題(2)で会話参加の変化のきっかけを探る際には、そのやり取りにどんなアイデンティティで参加するのかという「アイデンティティ・カテゴリー」(西阪 1995)に注目した。これは、エスノメソドロジーの会話分析の創始者であるサックスによる「成員カテゴリー」(Sacks 1972a,b)に基づく概念<sup>4</sup>である。参加者は、やり取りを通してその場で適切なアイデンティティを交渉する(西阪 1995)。選択

されるアイデンティティの変化は、参加のし方に影響すると考えられる。そこで、本研究のデータに見られる参加の様相の変化と、アイデンティティ・カテゴリーの関連に注目した。

## 5. 結果と考察

### 5.1 前半と後半の様相の変化

ルーカスとしんごのペアの参加の様相は、前半と後半で図1と2のような変化が見られた。

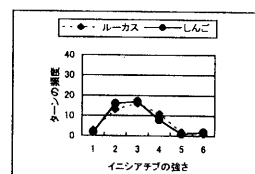
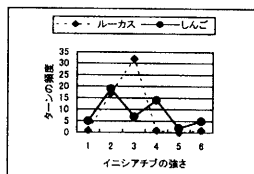


図1 前半(1~100ターン) 図2 後半(101~196ターン)

前半では、評価2(最小応答・相づち)、3(相手の発話内容を踏まえて新しい内容を付加)、4(内容に関する質問)のうち、しんごとルーカスの評価2の配分は、ほとんど同じである。しかし、評価3の配分はルーカスが高く、しんごは低い。反対に、評価4の配分は、しんごが高く、ルーカスは低い。グラフからは、両者の会話参加が非対称的であることがわかる。

それに対して後半では、ルーカスとしんごのターン配分のし方がほぼ等しくなり、対称的な様相になっている。

### 5.2 50ターンごとの様相の変化と会話例

#### (1)1~50ターン

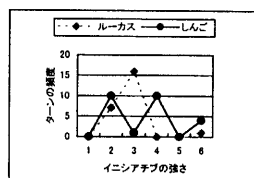


図3 1~50ターン

評価3と4の配分の差が際立っており、両者が非常に非対称的な会話参加をしていることを示している。

#### 会話例1 ルーカス(L) しんご(S)

(ルーカスがしている英語を教えるアルバイトは)

01L: あの家家庭教師みたい [な::

02S: [あ:::!

03L: [感じて::え::

04S: [家庭教師ですか [あ:::]

05L: [だいたいあの:うん喫茶店(.)などの(.)場所で会います。

06S: は::: h(.)日本に来て:::(.)一番ここは変だなんて思った(.)ことはなんですか

07L: 一番 あの 変なこと

08S: 変 変だな:日本人は

09L: ehhhhh

10S: ちょっと変だな:って [(.)° おもうこと°  
 11L: [う:::~::~:]ん  
 はりはそれは:あの:難しいとおもいます=あの::今あ  
 の::だいたい日本(.)の生活に::ん なれましたので::  
 12S: あ:あ::じゃあ::じゃあ::じゃあ::びっくりしたこと  
 13L: う:::~::~:]ん (3) 最初にびっくりしたことは: (:.)あ  
 の:日本人はだいたいどこでも(.)寝られることです  
 ~~~~~13 ターン省略~~~~~  
 (日本人は場所をかまわず寝ている。ドイツ人も旅行のとき  
 は乗り物で寝るが)  
 26L: あの:: 地下鉄の場合は:(2)う h:んすっごく珍しい  
 と思います  
 27S: う:::~::~:]ん(.)h あ:(4) .h じゃあ ここは:: に:h  
 あ::ヨーロッパに取り入れたい(.)ことだなあって  
 思ったことはなんですか(.)

このやり取りでは、談話の流れの方向を決める  
 ようなしんごの質問 (06S, 12S, 27S) と、ルーカス  
 の受身的応答 (11L, 13L) が繰り返されている。しん  
 ごは、ルーカスの応答に対し、評価や質問の意図の  
 説明をせず、またルーカスからしんごに対して問い  
 かけがない。この一方向的でインタビューのような  
 会話からは、しんごがルーカスを「ヨーロッパから  
 来た留学生」、自分を「受け入れ側の日本人」とい  
 うアイデンティティ・カテゴリーで捉えていると推  
 察される。そして、しんごは、もっぱらルーカスか  
 ら情報を聞き出すことに専念し、ルーカスも、その  
 位置づけでやり取りすることを受け入れていると考  
 えられる。

(2) 51~100 ターン

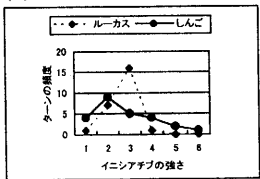


図4 51~100 ターン

図4では、しんごの  
 評価3の配分が高くな  
 っており、ルーカスの  
 話を踏まえて談話を展  
 開しようという変化が  
 見られる。

会話例2

01L: (カレーは) うん 食べたら::あの気分がちょっと:  
 わ [るくなる  
 02S: [あ:: (1)う:::~::~:]ん::一番好きな料理は何です  
 か 食べ物 [日本の料理で  
 03L: [う:::~::~:]ん (2)たぶん(.)おそばです  
 04S: あh° そうですが 昨日も食べてましたね hhh  
 05L: うん 今日もって 今日も持ってきま h し h た  
 hhh hhhh h  
 06S: あはは そんなに好 [き:  
 07L: [うん大好きです

しんごは、ここでも唐突な質問 (02S) をしては  
 いる。しかし、04S では、ルーカスの応答に対し、  
 自分が知っている相手の情報を笑いながら述べ、ル  
 ーカスもそのユーモアを受け止めて、連帯感を確認

しあうようなやり取りになっている。しんごとルー  
 カスは、互いに共有できるカテゴリーを探りあつて  
 いるようであり、アイデンティティ・カテゴリーに  
 変化が起こりつつあると考えられる。

(3) 101~150 ターン

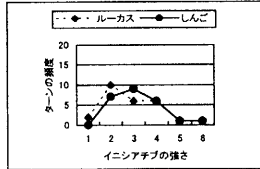


図5 101~150 ターン

図5では、ルーカ  
 スとしんごのターン  
 配分のし方がかなり  
 接近している。

会話例3

01L: うんうん  
 02S: (あ:::バレー b あ:聞きました)セッターだった  
 そう [ですね::  
 03L: [そうですね:(.)  
 04S: ぼくもバレーやってきました.  
 05L: d も::今::今はぜんぜんスポーツやってないか  
 ら::  
 06S: うんう [ん  
 07L: [うん hhhh ちょっと困る: hhhh. hhh

しんごは、02S や 04S で、積極的に自分と相手と  
 の共通点に焦点を当てようとしている。自分の知つ  
 ている情報を持ち込むことで、談話を推し進めるリ  
 ソースを提供している。一方ルーカスは、04S のし  
 んごの発話を05Lでトピック化せず、自分の話した  
 い内容を述べている。談話展開におけるルーカスの  
 イニシアチブが強くなっていることがわかる。

この段階では、「留学生と日本人」という対立す  
 るアイデンティティ・カテゴリーでのインタビュー  
 的やり取りではなく、「スポーツ愛好家同士」とい  
 う両者の共通するアイデンティティ・カテゴリーで  
 やり取りしていると考えられる。

(3) 151~196 ターン

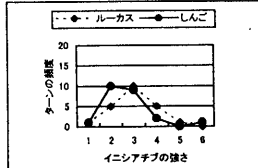


図6 151~196 ターン

図6では、両者の  
 評価3の「バランス  
 の取れたターン」の  
 割合がほぼ同じで、  
 イニシアチブはルー  
 カスの方が強くなつ  
 ている。

会話例4

01S: ジェットコースターは好きですか  
 02L: だ:い好きで [ :す  
 03S: [あ:僕も大好きです。お化け屋敷は  
 好きですか  
 04L: (..)すみません?

- 05S: お化け屋敷 Ghost house  
 06L: あ:::あ::う:ん(.)場所によってちがうと思います  
 07S: hhh  
 08L: 時々ちょっと つ つまらないと思います  
 09S: あ:::です うん ぼくもそう思います  
 [あの  
 10L: [でも, ジェットコースターが(.)だ:::いすき あのラ  
 ターアのジェットコースター  
 11S: 乗ったんですか

会話4の話題は、両者が参加を予定しているイベントである。ルーカスは、10L でしんごの 09S を遮り、「ジェットコースター」をトピック化している。談話展開におけるルーカスのイニシアチブの強まりが現れている。しんごは、11S の質問で関心を示し、積極的にトピック化に協力している。両者は「同じイベントに参加する者同士」というアイデンティティ・カテゴリで、より強固な共通基盤の上に立ち、やり取りを展開していると考えられる。

## 6.まとめと今後の課題

これまでの分析から、以下のことが明らかになった。会話参加の変化のプロセス(課題(1))については、質問と応答という一方向的で非対称的なやり取りから、相手の話す内容を踏まえて意見や情報を述べ合う「バランスの取れたターン」の応酬へと変化していた。そしてその変化のきっかけ(課題(2))については、両参加者のアイデンティティ・カテゴリの柔軟な交渉と変化が関わっている可能性が示唆された。本研究は、現場で学習者の非対称的会話参加が問題となった際に、その原因を探るための分析の観点を提供できると考える。

今後は、(1)非言語行動の分析、(2)会話の内容の質的分析の充実、(3)目的のある会話とない会話の比較等、会話の活動のタイプと参加者の参加のし方の関連を視野に入れた分析が必要だろう。

## 注

1. データの収録では、留学生9名と日本人大学性5名に協力を依頼し、同じ留学生が日本人学生と話す場合と留学生同士で話す場合のデータを収録した。各会話における前半と後半での様相の変化を見た結果、本研究が注目する NNS-NS ペアのうち、2組のペアの会話が非対称的なものから対称的なものへと変化していた。本研究の目的は、やり取りのプロセスの詳細な記述であるため、1組のペアのやり取りの変化を追うことにし、特に変化が著しく後半の対称的なやり取りに特徴があ

るルーカスとしんごのペアを対象とした。

2. 文字起こしのルールは下記の通りである。好井・山田・西阪(1999)を参考にした。

|          |                    |
|----------|--------------------|
| [        | ことばの重なり            |
| =        | 言葉/発話が途切れなくつながっている |
| (数字)     | 沈黙の秒数              |
| (.) (..) | ごく短い間合いとそれより若干長いもの |
| ::       | 直前の音の延び            |
| ?        | 語尾の音の上昇            |
| .        | 語尾の音の下降            |
| hhh      | 呼吸音(主に笑い)          |
| . hhh    | 吸気音                |
| —        | 音が大きい              |

3. コード化システムの詳細は、岩田(2004)を参照のこと。  
 4. 「アイデンティティ・カテゴリ」の概念の詳細については、Sacks(1972a,b),西阪(1995)を参照のこと。

## 参考文献

- 岩田夏穂(2004)「非母語話者が参加する相互行為の対称性と非対称性について-イニシアチブ-レスポンス分析の試み-」(未公刊)お茶の水女子大学人間文化研究科修士論文  
 西阪仰(1995)「成員カテゴリ」『言語』24(11), 105-109  
 好井裕明・山田富秋・西阪仰編著(1999)『会話分析への招待』世界思想社  
 Beebe, L. M. & Giles, H. (1984) Speech accommodation theories: a discussion in terms of second language acquisition, *International Journal of Social Language*, 46, 5-32.  
 Fan, S. K. (1992) Language management in contact situations between Japanese and Chinese, *Unpublished Ph.D. Dissertation*, Department of Japanese Studies Monash University, Australia.  
 Gaies, S. J. (1982) Modification of discourse between native and nonnative speaker peers, *Papers 16th Annual TESOL Conference*, 1-32  
 Linell, P. (1990) The power of dialogue dynamics, In I. Markova and K. Foppa(Eds.), *The Dynamics of Dialogue.*, New York, Harvester Wheatsheaf, 147-177.  
 Linell, P. Gustavsson, L. & Juvonen, P. (1988) Interactional dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis, *Linguistics*, 26, 415-442.  
 Linell, P. & Luckmann, T. (1991) Asymmetries in dialogue: some conceptual preliminaries, In I. Markova and K. Foppa(eds.), *Asymmetries in Dialogue.*, New York, Harvester Wheatsheaf, 1-20.  
 Sacks, H. (1972a) An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology In D. Sudnow, (Ed.) *Studies in social interaction*, 31-73. (北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法: 会話分析事始め」, 北澤裕・西阪仰編訳 1989『日常性の解剖学』マルジュ社 93-174)  
 Sacks, H. (1972b) On the analyzability of stories by children. In J.J.Gumperz and D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*. New York: Holt, Rinehart & Winston, 329-345  
 van Lier, L. & Matsuo, N. (2000) Varieties of conversational experience: looking for learning opportunities, *Applied Language Learning*, 11 (2) , 265-287